

説教 『 あなたがたも同じ覚悟で 』

小河信一 牧師

ペトロの手紙一 4章1節～6節

この説教の展開——

- ①心構え……残りの生涯に対して〈今から将来へ〉
 - ②心構え……終わりの時に向けて〈今から将来へ〉
 - ③心構え……数々の罪にふけていたことに対して〈過去〉
- まとめ……②心構えによる

私たちは、福音を信じて歩んでいます。その「福音を信じる」ということについてペトロの手紙一は、2:22-25でキリスト讃歌の形式によって書き記していました。そこでは、私たちは何を信ずべきなのか、また、信じた私たちはどのように生かされるのか、が説き明かされています。それは、現にペトロ（あるいはその後継者）の牧会していた教会が歌い、唱えていた「福音」です。それは、美しく深遠で、原「使徒信条」とも称すべきものです。

そのキリスト讃歌を手紙の中央部分に据えた著者は、手紙のクライマックスから結びへと至る中で、数々の勧めをなしています。それは、主から受けた「福音」を、どのように日々の生活の中に定着させていくかという、私たちの課題であります。

このペトロの手紙一に即して言えば、信仰生活の中心は、私たちが原「使徒信条」を「信じる」ことですが、私たちは、それにふさわしい生き方を「勧め」を通して教えられる必要があります。信じ続けることの困難さを熟知している著者は、私たちが日々に新しくされるよう、時に「正しい良心を願い求める」（Iペトロ3:21）、また時に「同じ心構えで武装する」（同上4:1）など、多彩な角度から勧めを繰り返しています。それによって、初代教会を代表する一人の伝道者の「信仰」には、核があったこと、そして、いつでも人に応じて証しできるまでに、それが生きて働いていたことが分かります。

ペトロの手紙一 4:1——

キリストは肉に苦しみをお受けになったのですから、あなたがたも同じ心構えで武装しなさい。肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりをつた者なのです。

前後の文脈からすると、手紙の著者は、信仰者の「心のあり方」という観点から論を進めていると捉えられます。すなわち、直前の段落で「洗礼は、神に正しい良心を願い求めること」（3:21）と述べたのち、さらに詳しく説明すべく、その「心」を「同じ心構え」という語句で受けて展開しています。

この手紙の鍵語である「苦しみ」が再度登場しました。私たちの信仰の源泉には、「ただ一度」（Iペトロ3:18）の十字架の苦しみ（同上1:11、2:23）、つまり、主イエスが私たちを罪から救い出すために非難や嘲笑を浴びつつ耐え忍ばれたという苦しみがあります。それが、私たちの信仰の基盤であり、私たちの心構え・覚悟の基盤であります。

罪から救出される側の私たちは、主と同じように十字架の苦しみをこうむるわけではありません。その「十字架の苦しみ」は、すでに主イエス・キリストが全うされ、輝く勝利と共に成し遂げられてしまったものです。復活による永遠の命のうちに、苦難は乗り越えられました。ただただ感謝をもって、私たちはその神の尊い御心の前にひれ伏し、神に応答するのです。そのような謙虚さと感謝のあふれる心が、主イエスと「同じ心構え」、患難に対する覚悟です。

従って、よく言われるように、「同じ心構えで武装しなさい」ということは、いわゆる苦行や修行とは異なります。苦しんで自分を高めようと、為す業とは違います。自分で決心するのではなく、あくまでも主の御業に対する応答・感謝として、私たちの身と心にあらわされるものです。「善を行って」も（Iペトロ2:20）、ののしられ侮辱されるようなとき、私たちの内に驚くべき忍耐と共に喜びさえいて来るのは、その土台に主の「十字架の苦しみ」があるからです。

洗礼の時に、私たちは主にあって「心構え」を固められます。その時、覚悟が出来ています。しかし、その「心構え」は一面で、まことに崩れ易いということを、私たちは知らねばなりません。

エレミヤ書14:10——

主はこの民についてこう言われる。「彼らはさまようことを好み、足をもうとしない。」主は彼らを喜ばれず、今や、その罪に御心を留め、咎を罰せられる。

キリストの立派な兵卒・歩兵であっても、しばしば「足元に付け込まれる」（足をすくわれる）とは、まさにこの事です。神と共に預言者エレミヤは、人々の「足に慎みがない」ことを嘆いています。すなわち、全身全霊をもって捧げるべき信仰生活において、人の足が制御されていない、と言うのです。これは、鋭い見抜きです。自分の心は留めようとするけれども、つい足が動き出し、さまってしまう、ということです。放蕩にきつけられる脚の強い動きに、自制心は打ち負かされます。

そのような「心構え」のな兵卒は、当然「武装」しなければなりません。パウロもまた、「光の武具を身に着けましょう」（ローマ13:12）とめています。平和宗教であるキリスト教という観点からすれば、一種の比喩とは言え、「武装」や「武具」はきわどい表現です。しかしそれほどまでに、真剣に私たちは、上からのに従って、キリストの苦しみに生きる覚悟をなし、保持しなければならないのです。

①と②の心構えについて

ペトロの手紙一 4:2——

それは、もはや人間の欲望にではなく神の御心に従って、肉における残りの生涯を生きるようになるためです。

ペトロの手紙一 4:5——

彼らは、生きている者と死んだ者とを裁こうとしておられる方に、申し開きをしなければなりません。

さて、冒頭4:1の「心構え」（覚悟）は、「理性の中に」というのが原意で、「同じ心構えで」は、「同じ洞察力をもって」あるいは「同じ見通しをもって」と意識することが可能です。すなわち、この「心構え」は、過去・現在・将来にわたる神の救いの歴史全体を見渡しているような「洞察」を備えています。つかの間のものではない、確固たる覚悟ならば、そうであるに違いありません。キリストの十字架の苦しみから、罪と死に対する勝利・復活へ、という救いの出来事が、私たちの「心構え」の基盤となっているとすれば、そのように、厳然と「洞察」が永遠性をんでいるのは、けます。

「同じ洞察力をもって」、過去・現在・将来を見渡すというとき、手紙の著者は、4:2の通り、まず今から将来について語ります。

ひと言でいえば、「肉における残りの生涯」への覚悟が主にあって出来ているということでしょう。ここには、神に自分の「残りの生涯」をゆだねている人、あるいは、今から寿命の最後までを、神に捧げようとしている人の姿があります。

生きていても死んだ状態にあった自分、闇の中に見捨てられていた独りの自分に、愛する神と隣人に奉仕する「残り」の時間があつたのです。かけがえのない「残りの生涯」への思いが、先の「心構え」に重みを与えます。

さらに、手紙の著者は、「偶像礼拝などにふっている」人々（4:3）に裁きを宣告する文脈の中で、終わりの時と最後の審判の時への、すなわち、将来への「心構え」を語っています（4:5）。

そこで集中すべきは、再臨の主、イエス・キリストを迎えて、私たちが裁きの座に立つこと、そして、「申し開き」・「弁明」（原意は**言葉を与える**こと）をすることです。受洗後の「残りの生涯」をも含め、自分の犯した罪を残らず言い表すということでしょうか。今からの祈りの課題ですが、神への「申し開き」にまさって、その時にこそ、神を賛美し、神に感謝を言い表したいと願います。

このように、洗礼を受けた者、新しい命にあずかった者には、自分の生涯の終わりとこの世の終わりととの展望が一挙に開けます。信仰者は、自分の人生とそれを包み込んでいる神の大いなる救いの歴史について、終わりに至るまでの見通しを持っているのです。

③心構えについて

さて、ペトロの手紙 一 4:2（と4:5）で明るい将来への展望が、最初に掲げられたのちに、時間的にはさかのぼりますが、手紙の著者は「同じ洞察力」をもって過去を振り返っています。冷静に過去を顧みたとき、はじめて、私たちの覚悟は確たるものとなります。洗礼の「後」のみならず（3:21）、神の光が照らす洗礼の「前」も見逃してはなりません。

ペトロの手紙 一 4:3――

かつてあなたがたは、異邦人が好むようなことを行い、好色、情欲、泥酔、酒宴、暴飲、律法で禁じられている偶像礼拝などにふけていたのですが、もうそれで十分です。

「かつて」と明確に「過去には」あった事実が、列挙されています。その中で、「好色、情欲、泥酔、酒宴、暴飲」など、あらゆることの根っこになっているのが「偶像礼拝」です（竹森満佐一）。「偶像礼拝」というのは、神ならぬ神を拝むということで、現代に生きる私たちにも遠い話ではありません。もしも、「自分の願い」や「人間の欲望」（I ペトロ4:1）を第一とするならば、神ならぬものが神にまつりあげられています。それらは、機会を盗み見して、私たちの生活を乱しにかかります。「偶像」は、自分のすぐ近くにいる、否、自分の中にいる！ということです（ローマ7:20以下参照）。

ところで、手紙の著者は、過去の振り返りの中で、「もうそれで十分です」と述べています。母親が幼な子に語りかけるような、やさしい言葉ですが、しみじみとした味わいがあります。

「あなたがたは罪とのかかわりをもうすでに断ち切っています」（I ペトロ4:1）、「もうそれで十分です」。「好色、情欲……」と、悪徳を数え上げ、あなたがたに念を押して「それで十分です」と言いましたということです。

聖書を読むとき、私は響き合う御言葉を思い起こすことが、とても大切だと考えています。例えば、この「もうそれで十分です」という一句から、ある有名な聖句が心に浮かんで来ました。

コリントの信徒への手紙 二 12:9――

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。

一方、「もうそれで十分です」は「もう止めなさい（ストップしなさい）」とい意味で、他方、「あなたに十分である」は、「満ち足りている」という意味ですから、論理的には両者はつながりません（ただし原語・ギリシャ語的には前者「十分な」と後「十分である」とは、形容詞と動詞で同一語源です）。聖霊の導きを祈りながら、二つの御言葉の共鳴から、私が聞いたことは、次のようなことです。

「もうそれで十分です」。ストップしなさい。これからは、神の「十分さ」の中に生きなさい。

いや、私はまだ満ち足りていません。せめて、私の一つ二つの願いをかなえてください。もっと欲しいのです。それに、周りのあの人々ほどに、私は満ち足りていません。不公平ではないでしょうか。

あなたは「不十分なままでよい」。むしろ、あなたの弱さや貧しさの中に、神は宿られます。主にあって、以前の生活を止めなさい。そして、全き神の「十分さ」の中に生きなさい。「(と一緒に) ひどいに加わる(走っている)」(Iペトロ4:4) ような、罪に引かれるあなたの生活は、「もうそれで十分です」。

御言葉が響き合うとき、私たちの信仰は深め広げられる、と同時に、個々の御言葉の真意が再認されるのではないのでしょうか。

まとめ……②心構えによる

ペトロの手紙 — 4:5-6 —

⁵ 彼らは、生きている者と死んだ者とを裁こうとしておられる方に、申し開きをしなければなりません。⁶ 死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人間の見方からすれば、肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きるようになるためなのです。

改めてこの二節を読むと、私たちが抱くべき、キリストの同じ「心構え」について、驚くべき見通しが示されていることが分かります。それは、私が今生きている「残りの生涯」のみならず、私が死んだ後(ただし主の再臨は私が生きている時に起こるかもしれませんが)、終わりの終わりまで見通して固められている、そのようなまことに壮大な覚悟です。

私たちがこの世を去ったのちも、主なる神は、生きている者と死んだ者ともに福音を宣べ伝えておられます(Iペトロ3:19、4:6)。

ペトロが、「あなたがたも同じ心構えで」と語った、「心構え」は私たちが到底造り出すことのできないものです。キリストに教えられ、キリストがそばにおられることによって、いつも私たちが「同じ心構え」ができますように、御心でしたら、「同じ心構え」を皆で分かち合い、証しすることができますようにお祈り致します。